近世浄土宗本堂の研究（そのX）

通順寺，即願寺，法信寺，妙用寺，聯芳寺本堂

岡　野　　清

Study of Main Hall in Jyodo Shin Sect in Edo Period (part X)

Tsûjunji, Sokuganji, Hôshinji, Myoyôji and Renpôji

Main halls especially the middle size main halls, of Jyodo Shin sect became all at once gorgeous which were very primitive in their original forms in the late of Edo period. But if we find their original forms by inquiring into traces of remodelings, we can recognize both their primitive original forms and altered advanced forms.

In this tasis l give 5 examples of such kind that exsist intensively in the western part of Owari district to show abovementioned fact.

この地方における浄土真宗寺院本堂についてては，既に発表を続けてきたが，特に本願寺派は現在三河，尾張の平地部に，庶民信仰に支えられて広く分布しており，その主な名刹，巨刹は三河南西部に多い。本願寺系に属するこの宗派がこの地方にかく拡大されて現在の基をなしたのは，室町時代末に中興の蓮如上人が諸国行脚して布教に務めた時であった。当時すでに定着していた法脈である高田派や，密教系の寺院も本願寺系に帰依して一層教団が強化された。

尾張地方には著名な大型寺院は少ないが，西部の米作地帯には本願寺系の中小型寺院が断然多く，各集落毎にあまねく分布している。本稿で採り上げた本堂が存在する地方の各寺院数を一覧してみても，その大半は真宗大谷派である（表１）。それらの寺院が開創された室町時代

表１

	真言宗	浄土宗	真宗大谷派	臨済宗妙心寺派	曹洞宗
祖父江町	2	6	21	0	2
尾西市	1	6	31	4	3
平和町	2	2	9	0	0

末から江戸時代初期にかけては道場又は坊として存在していたが，その後漸次寺号を持つようになった。それらの現存する本堂の建物も，江戸時代初期から，中期にかけて造立されているが，濃美平野の沖積地帯にあって，河川の氾濫や伊勢湾台風の被害もさることながら，地盤が軟弱なために，明治24年の濃美大地震の際に比較的規模の大きい堂で，瓦葺の格式の高いものは，大打撃を受けて壊滅的な状態となったなかで，北西部の二地区に５棟の古い本堂を探し出した。その残された建物は，本堂規模としては面積的にみても中規模に属するが，それらの堂は，江戸時代末から明治にかけて増補されているので，この部分を復元によって整理すると，当初の部分は極めて簡単で，規模も小型であり，坊として存在していた次の型式を保っていたように思われる。これらは平面，構造，意匠とも共通する型態を持っており，寄棟茅葺の屋根で軽かったために，幸に濃美地震にも健在だった。本稿では，共通する特徴をもつこれらの生き残った本堂の原型を探究して，その期における状況とその後の発展の経過を明らかにしようと思う。

通順寺本堂　　中島郡祖父江町二俣瀬戸，天文４年開創，寛永16年（1039）建立

即願寺本堂　　中島郡祖父江町島本堂幸之切，寛永14年開創，万治４年（1661）建立

両堂とも建立年次も近く，規模，平面は，現状においてもほぼ同型であるが，復原すると全く同じ規模となるので，一括して取扱う。

両堂とも木曽川流域にあって茅材に恵まれていたためか，現在まで主屋部分は茅葺であり，その後周囲に室を拡張した際の屋根や向拝部分を桟瓦葺にして付け足している。先ず後方へ増補した際に，新たに来迎壁と唐様の須弥壇を新設し，内陣脇仏壇を後方へ１間ずらして中央間に後門を設けるため中央仏壇を撤去して，来迎装置のまわりを行道出来るような構えにした。これはこの地方

写真 1　通順寺本堂正面

写真 2　即願寺本堂正面

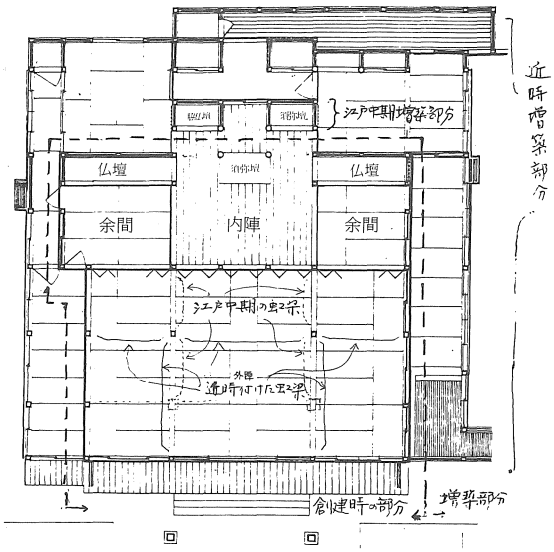

図 1　通順寺本堂現状平面図

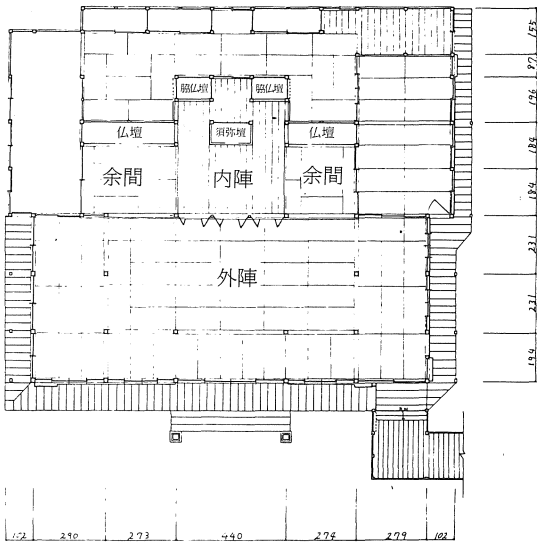

図 3　即願寺本堂現状平面図

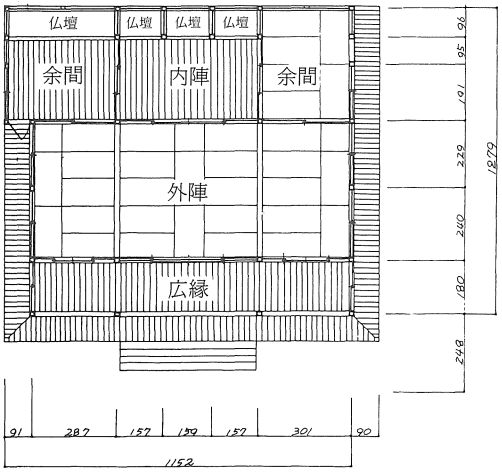

図 2　通順寺本堂復原平面図

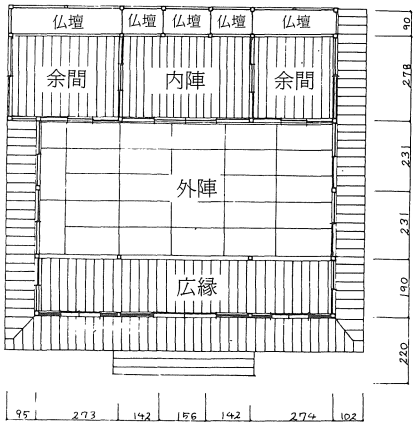

図 4　即願寺本堂復原平面図

の中小型寺院の本堂が恐らく江戸中期をすぎる頃に，各寺が相倣って寺格を高め，同様の改造を行ったためであろう。その後，更に後方へ庇を延長して後堂や本堂へ通ずる廊下を整え，両側面にも軒庇を延ばし，又は桟瓦葺にした庇を降して(通順寺では1間幅，即願寺では1.5間幅)，各控室等を増やし，創建時の約2倍の規模にまで拡張して漸次必要な規模に適応させてきた（図1，3，写真1，2，3）。

両本堂を旧構造の痕跡や風蝕の証拠をたどって，創建当時の旧態を復原してみると，外陣の手前1間は両堂とも広縁となる(図2，4)。即願寺は復原しても広縁は現状の畳敷が取除かれてもとの板張が露出する程度で，堂内の手前1間は現状と変わらないが，寛永16年（1631）建立の通順寺は前面広縁を堂外に吹放ちにした本願寺系本堂の基本が守られており，当初の建物は堂内は狭く奥行2間半の外陣であった(図2)。その後内陣余間境通りを延長した線で，外陣を3分して無目敷居を設けてその中央に角柱を新設して，その柱の前後にわたって1間強の虹梁を内陣前柱及び広縁内柱に架した。この時期は，現在この柱と内陣前柱間に架した虹梁の絵様からみても，江戸時代中期を少し降る頃である(写真4，5)。即願寺でも外陣内は一つの広間で柱は存在していなかったが，当初からこの位置に2間半を1梁間とした虹梁が架けられており(写真10)，両堂とも外陣内は一平面の27.5帖敷であった（図2，4）。

通順寺ではこゝで次第に仏堂化してきていた当時の型に追いついたのである(写真4，5)。又両堂とも，前面に桟瓦葺の一間向拝をつけたのもこの頃であると思われる。向拝柱は几帳面取粽つき，虹梁上蟇股，連三斗，繋虹梁，板手狭つき，一軒疎垂木と言う簡単ながら本堂らしい意匠を見せ，3級木階で上るが，登勾欄はない。更にその後，広縁，外陣境の柱を撤去し，そこに架けられていた虹梁を実長2間強のものに架け変えて，広縁前面にまで延ばした。又外陣内の柱間に桁行に2間半の大虹梁を架けて一層仏堂らしい外陣が整う。この時期に新造された虹梁は絵様が異なり，新材であることからみても，幕末から明治初め頃の仕事と思われる(写真4)。この時に広縁外陣境の建具間仕切は広縁前端まで1間移動されて，外陣が広がり，即願寺と同型式となる。このことは創建当時の棹縁天井がそのまゝ残されており，廻縁や棹縁の割付からも判定出来る(写真5)。また建具位置が移動された時に撤去された内法長押，鴨居跡がもとの場所に残されている（写真7）。この外陣が拡張された頃に，更に両堂とも後堂を付して控室を増やし，外陣両側面にも更に1間半の脇の間を付加して，外陣の収容面積を増やし，現状のようになる(図1，3)。もとの外陣外側の両妻柱，内法長押には風蝕があり，鴨居には3本溝が残り（写真11)，戸2，障子1で戸締っていたことが分る。

内部の間仕切装置については外陣前面には，敷鴨居に2本溝が残されており，内陣前では現在3分された位置に新たに柱を立てて，各柱間に巻障子を付しているが(通順寺では余間前とも)，後補で，もとは内陣前では2間半スパンを，余間前では1間半スパンを引違建具で戸締っていた(図2，4)。その上部小壁には，外陣側にのみ出組斗横が嵌め込まれ，透彫欄間がつき，金泥塗，周囲黒漆塗であるが(写真6)，何れも後補で，元来は簡素な堂であった。内陣と余間境には三本溝の敷鴨居が残り，もとは襖仕切であり(図2，4)，両余間の外側柱と仏壇裏柱の外側には風触があり，旧建物はそこまでで終る（図2，4）。当初の建物は前述の通り，両余間仏壇を一直線に結んだ列に内陣の須弥壇，脇仏壇が並び，現来迎装置なはかった。これについては余間仏壇の前面柱の内陣内側で，もと脇仏壇框を取外して，埋木したことが打診され，この柱の後側にはもと壁の貫跡が認められることからもわかる。その上部にはもと脇仏壇上の虹梁が架してあったが，第1次の移動で半間後方柱に後退してつけ替えられたので，現在は痕跡のみ残る。即願寺では更に脇仏壇が半間後退して現位置に移された際には虹梁はそのまゝ残り，新位置に新虹梁を架したので，絵様の違う新旧の虹梁が存在している(写真9)。結局，両堂とも規模，室の配置は全く同じになり，向って左余間は外へ半間軒下へ張出して6帖間の広さとなり，通順寺では向って右の余間では背面にある現在の仏壇やその前面の虹梁はなくなり（新材で虹梁上の小壁は元開放であり，天井は仏壇上まで通る)，畳敷の6帖間となる（図2)。又この寺では前述の通り前面広縁は室外となる。外陣周囲の外廻りには当初から三方に濡縁が存在し，両脇の余間や庫裡への通路の役割をなしていた。

この両堂は建立時も地域もほゞ同じであって，復原すると結局現本堂とは規模も意匠も変わって同型式のものになるが，細部について即願寺の方がやゝ進歩したところがあり，これより22年前に建立された通順寺は以後建立されたこの地方の小型真宗本堂の祖型であると考えられ，この両堂ともとは須弥壇や来迎柱がなく，外陣内に矢来内や柱列もなく，特に通順寺は向って左余間には仏壇もなく，極めて邸宅風な意匠で扱われている。その点では真宗の道場や坊の型式から発展した際の初期の過程を示すものと思われる。

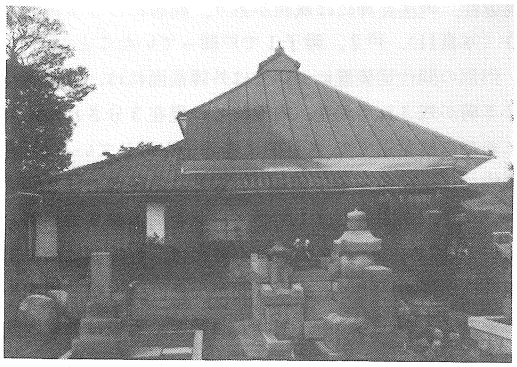

写真 3　通順寺本堂南側面からみた下屋庇

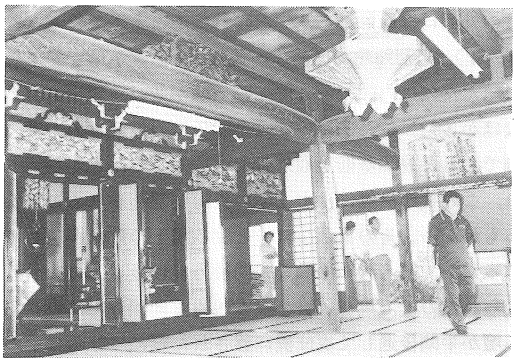

写真 4　通順寺本堂外陣

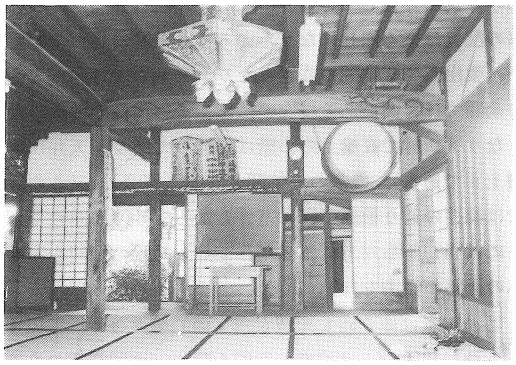

写真 5　通順寺本堂外陣北面

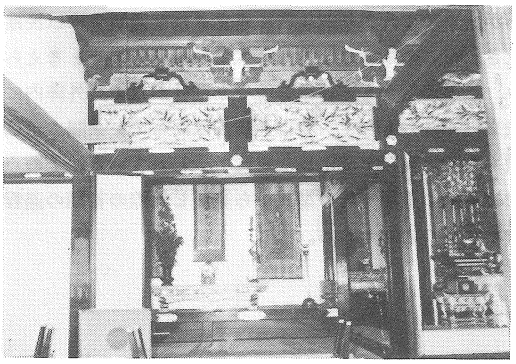

写真 6　通順寺本堂南余間前の外陣

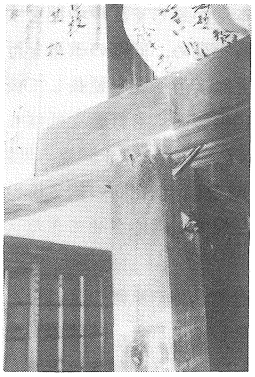

写真 7　通順寺本堂もと外陣広縁境の鴨居跡

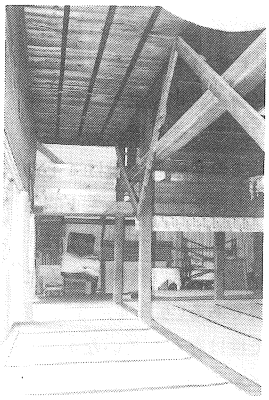

写真 8　即願寺本堂広縁外陣境

写真 9　脇仏壇の旧・新(下)虹梁

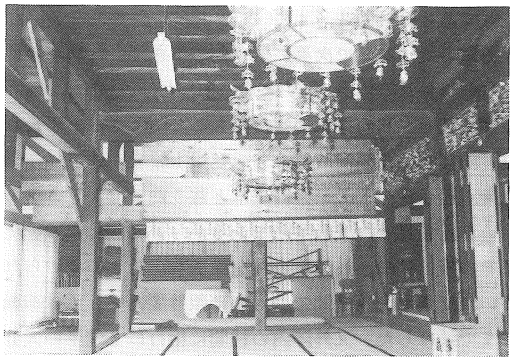

写真10　即願寺本堂外陣

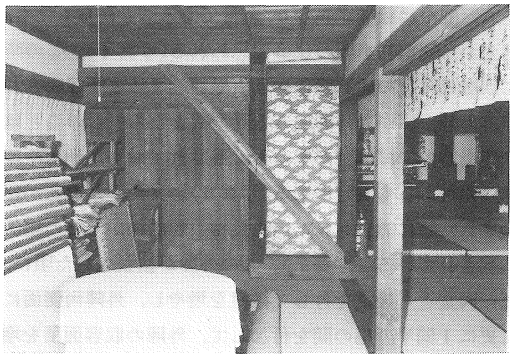

写真11　即願寺本堂外陣南の庇部分

法信寺本堂　　尾西市北今下渡

文亀2年(1502)創立，元禄3年(1690)本堂建立

寺の由緒については，往古は天台宗であったのを，文亀2年（1502）蓮如上人の影響を受けて本願寺派に転じている。現本堂は元禄3年（1690）庚午卯月廿二日大工三州碧海郡大濱住尾崎市十郎藤原清常，宝永7年瓦棟再補……（棟札）とあり，様式的にみてもその時の建立とみてよさそうである(写真13)。建立後他の寺と同様に向って右側面と背面に1間半の幅で桟瓦葺の下屋を増築している(写真12，図5)。この堂を前二者同様に復原すると桁行5間（実長6間），梁間6間（実長6間）寄棟造茅葺で，一間の桟瓦葺の向拝を付した堂となる（図6，写真15)。前二堂より創建時の規模がやゝ大きく，外陣奥行が3間，見付幅実長6間となるため，外陣の床面積に余裕があるためか，主屋の前1間は広縁となって堂外に吹放ちとなる(図6)。外陣中央間の見付幅が3間の大スパンとなったため，中間に柱2本を入れて3分され，内陣境も同様となる。奥行も前述の通り半間深まったため，中央に柱を立てて前後の梁行に無目敷居と虹梁を通し，手前の柱間の虹梁より奥の柱間のそれを挙鼻の差肘木をつけて一段上げて架けており，棟札にもある通り三河の大工の作のせいか三河南部に見られる方法で外陣を梁行に3分し，後出の妙用寺，聯芳寺と共に，一般真宗寺院の外陣に近ずいた型に進歩してきた(写真16)。内陣の仏壇も前例同様に一直線仏壇となって道場や小規模寺院の定型を未だ保っておるが(写真17)，向って右の余間は前二者より進歩して拡大され，背側面に半間ずつ押出された平面を持つようになり，外陣側面の濡縁から突当たって片引戸で両余間に入れる型となった(図6)。この向って右余間の背面仏壇は虹梁が新しく，更に虹梁下の柱内側にはもとの土壁貫の痕跡が，柱下部に床框の取付痕があることから(写真14)，もとは通順寺同様に余間仏壇はなく，しかも床の間が付されていたことがわかる。大型の真宗道場の僧侶の控室となっているものにこの平面をもっているものを多く見受ける（この地から西部にかけて同様の型態を持つ堂が存在する)。なおこの堂は近時の災害で現在屋根部分のみを改装中である（写真12，災害以前のもの)。

妙用寺本堂　　中島郡祖父江町祖父江中屋敷
　　寛永18年（1641）創立，
　　正徳3年（1713）本堂建立

聯芳寺本堂　　中島郡祖父江町申新田芝
　　天文2年（1588）創立
　　寛保4年（1741）本堂建立

両寺とも近似しているので一括して取扱う。妙用寺は明治42年に書かれた「武山妙用寺系譜並年代記」による

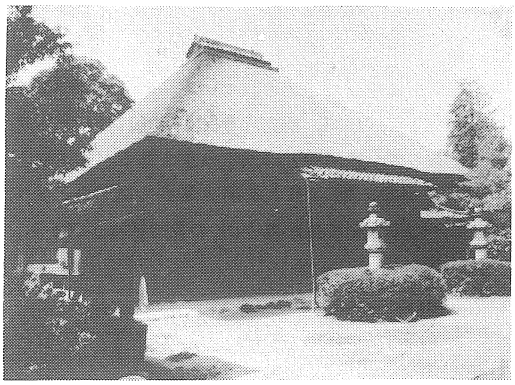

写真12　法信寺本堂全景

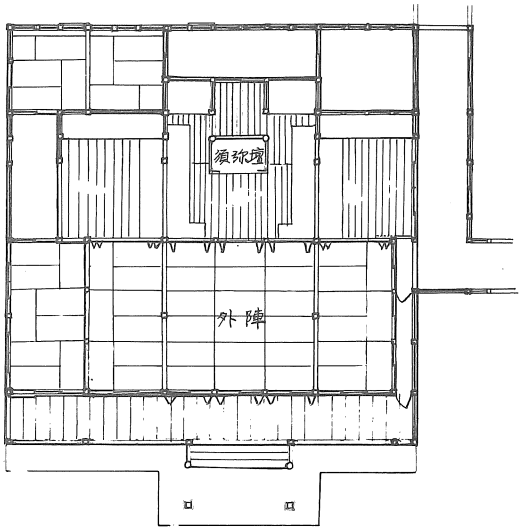

図5　法信寺本堂現状平面図

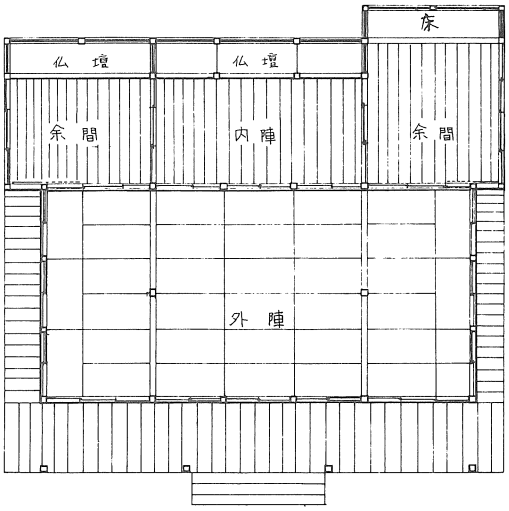

図6　法信寺本堂復原平面図

ともと天台宗であったものを永正11年（1515）真宗に転宗し，寛永18年（1641）妙用寺を興し，正徳３年（1713）の頃に御堂を再建したと記されている。聯芳寺は寺伝によれば天文２年（1533）創立，寛保４年（1741）現本堂の建立とあって，妙用寺とは28年の差である。両本堂とも，復原すると，前三者より漸次進歩した平面となり，通順寺より約１世紀の差があり，この間の推移がわかる。

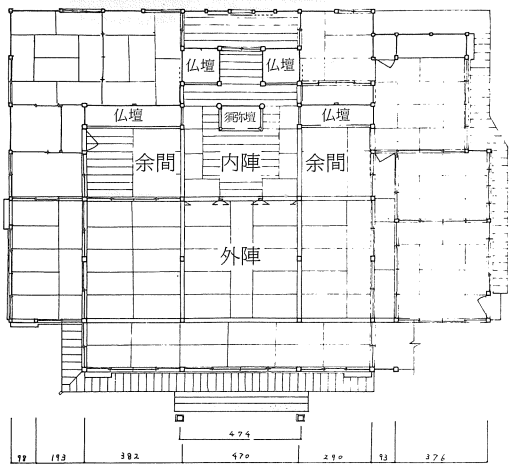

図７　妙用寺本堂現状平面図

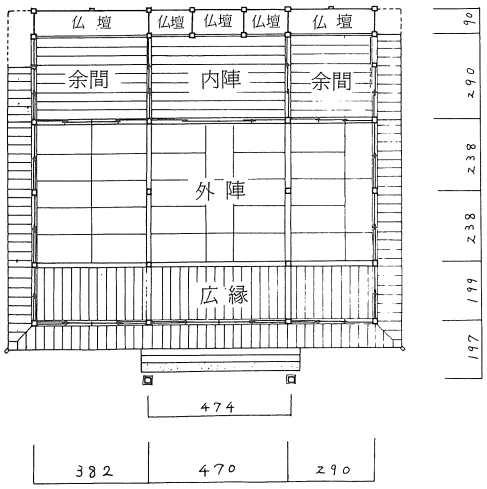

図８　妙用寺本堂復原平面図

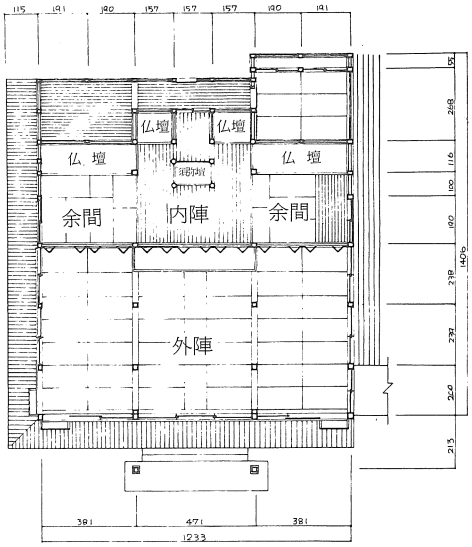

図９　聯芳寺本堂現状平面図

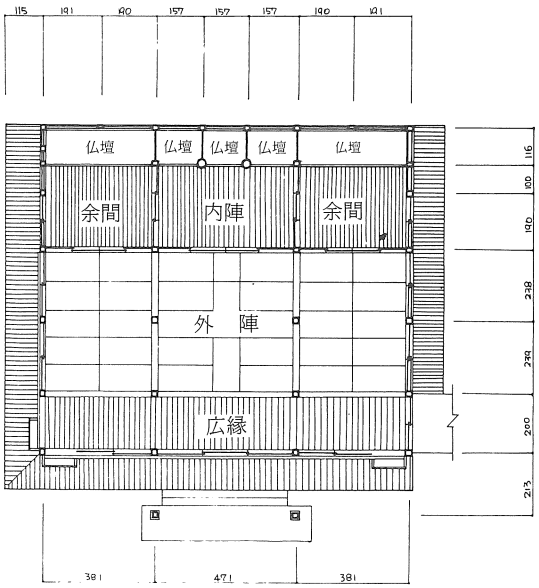

図10　聯芳寺本堂復原平面図

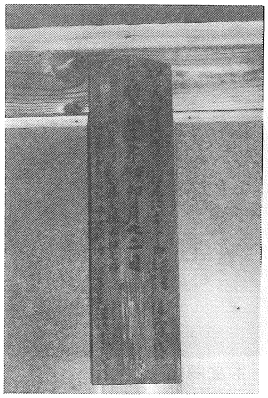

写真13　法信寺本堂棟札

写真14　同北余間仏壇上虹梁

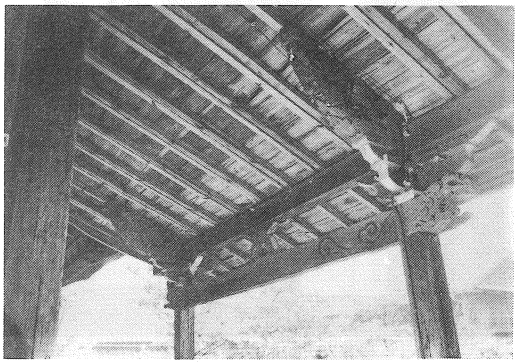

写真15　同向拝

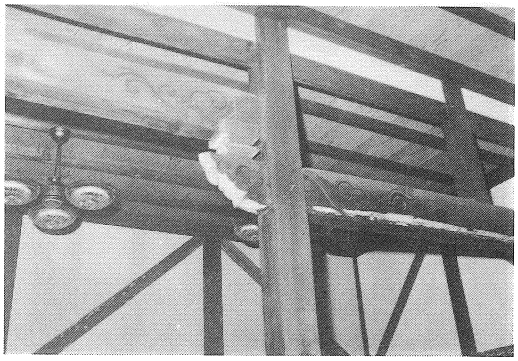

写真16　同外陣柱列の虹梁

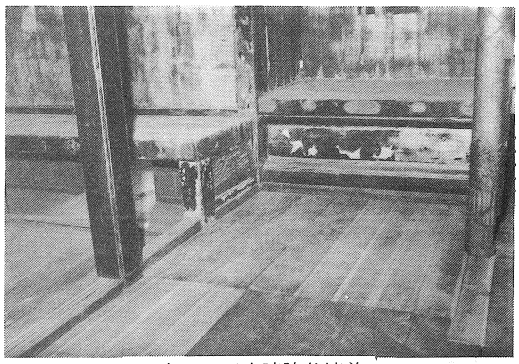

写真17　同内陣脇仏壇前

即ち，外陣幅を余間側と一致させて平面はほぼ正方形となり（図8，10），外陣内部の余裕がなくなったためか，前方の広縁は再び堂内に取り込まれてきたため，外陣内部は，広縁を含めて3間半の奥行となり，半間広くなる。内部の柱列や虹梁は変わらないが，天井下に一部小壁がつき，手がこんでくる(写真19，20，21)。また中央間の正背面は，再び実長2間半のスパンとなったので，前面では建具引違いとし，背後の内陣前では通順寺，即願寺同様後補の柱を立てて，仏壇型の巻障子を付して荘厳している（写真21，26)。内陣前の斗栱は，聯芳寺になると，寛保4年（1741）ともなるので，更に一層一般真宗仏堂に近ずき，柱上及び束上には，初めから斗栱，支輪を付して飾り，内陣背面の諸仏壇も一直線に並んではいるものの，中間2本は，円柱間の頭貫を唐破風型に迫上げたり，虹梁，蟇股に支輪を配するなど(写真27)，かなり仏堂化が進む。両脇の余間の見付幅も同じになり，堂全体の平面が左右対称となるなど，仏堂としての尊厳が一層高められてきている（写真26)。

むすび

ここに挙げた現在は中型に属する5棟の本堂は，建立時は江戸時代初期の寛永16年(1639)から寛保4年(1744)の約1世紀間であり，同地域のものと言うこともあって共通した形態をもっている。真宗寺院は，他宗のそれに比して，江戸時代初期まで極めて簡素で，住宅的な意匠をもっていたが，中期以降から急速に装飾化が進んで，幕末には，他宗派を凌ぐまでに華麗な仏堂に変化してきたのであるが，それは本例でも知られている通りである。これらを復原した結果は，それぞれの建物の初期の簡素な状況を判明させ，現状は，著しく仏堂化した姿を示している。このような同規模，同時代，同推移の事例が，この地方に群をなして存在していたことは，古い仏寺建築が，急速に破壊されている現今，稀有で，貴重なことであった。これによって庶民信仰に支えられた真宗建築の初期の形態とその後における発展の経過を，明確に探り得た訳である。

参考文献

岡野　清：三河における浄土真宗本堂の研究　その(2)
日本建築学会学術講演梗概集，
No9052，(1977)

岡野　清　近世浄土真宗本堂の研究（そのIII）愛知工業大学研究報告13号
P299～312，(1978)

岡野　清　同（そのIV）13号
P313～334（1978)

（受理　昭和56年1月16日）

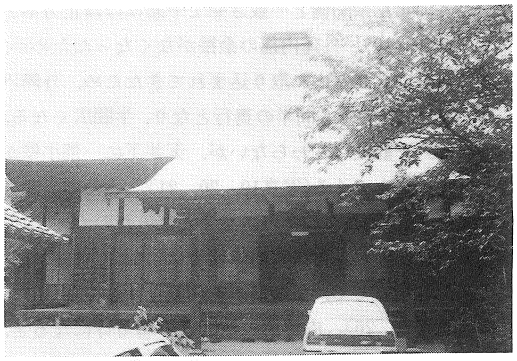

写真18 妙用寺本堂正面（東面）

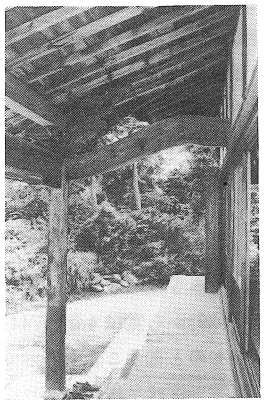

写真19 同上向拝

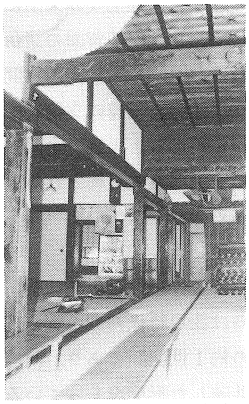

写真20 同上広縁外陣境

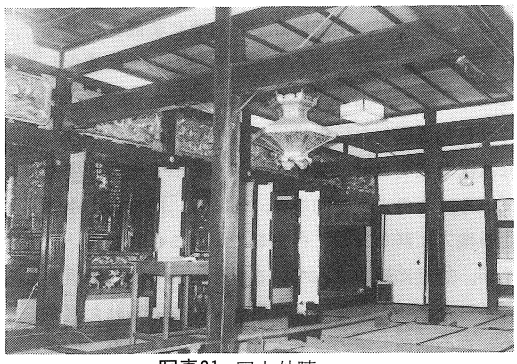

写真21 同上外陣

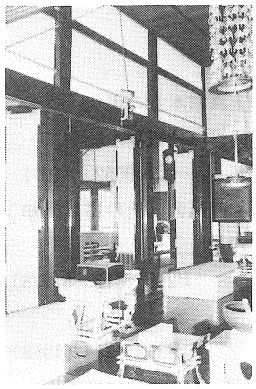

写真22 同上内陣見返り

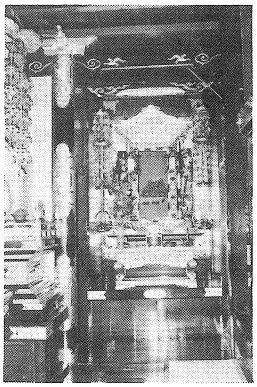

写真23 同上内陣脇仏壇の新旧（上）虹梁

写真24 聯芳寺本堂南面

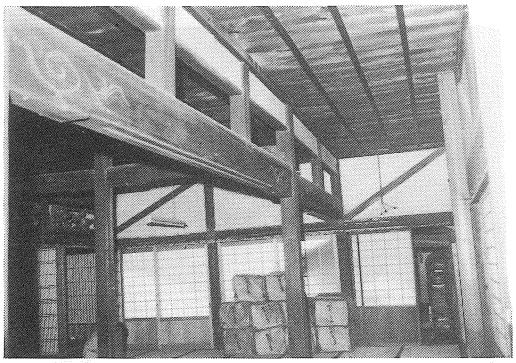

写真25 同上広縁外陣境

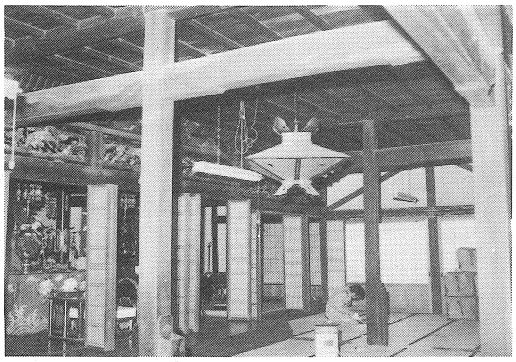

写真26 同上内陣前と外陣

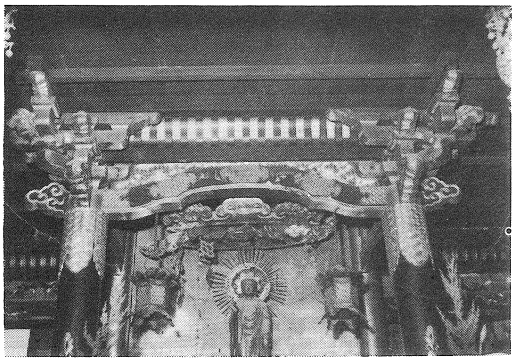

写真27 同上来迎柱上部